

OISCA

—人と育む、地球といきる—



(TOPIC)

東日本大震災から15年

“守る未来”へのステップ

MARCH | 3
2026

今月の
OB & OG

日本で学んだオイスカ研修生の今を紹介します。

ディポログ周辺の
OBたちもみんな元気に
頑張っています！



FILE No. 08

リエル・カエルマレ (62)

愛称：リエル

- 出身国 フィリピン
- 研修歴 西日本研修センター／
農業一般コース(1990年2月～91年3月)
- 現在の職業 市役所職員(農林課)



故池田先生(後列左)と村の子どもたちとパマンサラン研修センター
周辺で植林するリエル(前列左)

池田先生の思いを紡いで

私は今、フィリピン・ミンダナオ島のディポログ市役所で働いています。昔からオイスカを支えてくださっている会員の皆さんは、ミンダナオやディポログと聞くと故池田廣志氏を思い出す方も多いのではないのでしょうか。

日本での研修を終えて帰国してから、ディポログ市の山の方にあるパマンサラン研修センターで農業指導を続けていました。このセンターには、毎年池田先生が多くの日本人学生やボランティアを受け入れていましたから、地元の青年だけではなく日本人の青年の指導にも長く携わってきました。池田先生から直接教えてもらいながら活動できたことを今でも誇りに思っています。

2014年に池田先生がお亡くなりになってから、この地でのオイスカ活動は停滞していましたが、OBたちはそれぞれの地元で農業に関わる仕事を続けながら地域に貢献したいと考えて

きました。今年、ディポログ周辺のOBたちが集まり、何か活動を再開させたいと話し合い、2月に有機農業のセミナーを実施することができました。これからも人々のために尽くしてきた池田先生の思いを忘れることなく、OBたちが協力してオイスカの活動を続けていきます。

今、パマンサランをはじめとするかつての植林地は大きな森になっています。かつてこの地を訪れ、木を植えてくださった皆さん、ぜひ再訪して森が蘇った姿を見てください！



「子供の森」計画参加校のモニタリング。妻(研修センター勤務時代に出会った元研修生)も市役所に勤務し、オイスカ活動をサポートしてくれている

月日と地の大恩を知る

「人は月日と地の大厚徳で生きる。月日と地の有り難い守護の許に地上に生まれ、火と水の力で日常生活に欠くことのない衣・食・住を與えられ、月日と地を離れては一日も暮らせない。これを基準として人は生活する。

太陽は火、月は水である。月の働きによって、満潮・干潮が起こり、月の水分で農作物を育てる。満月には水分を上げ、暗夜には水分を下し、調節をとり、必要なだけの水分を與えて作物を稔らせる。この目に見えない大活動が月の働きである。大地は春・夏・秋・冬と気を合わせ、地の気が起こりて草木を生じ、森羅万象悉くが大地で完成される。月日と地の大恩により人は定命のある限り続く。火は大地と水との対象で光と熱を起こす。月は大地と火の対象で水の働きが起こる。また大地は火と水によって人群萬類を生成化育する。三位一体で切り離せない。如何なる不潔も火で焼却して清める。水によって洗い流しこの世を清浄にし、大地は不潔なものを抹消し新しく次々に生みなし清浄にする。この月日と地の三つの働きで如何なるものでも清められる。例えば人も死したる肉體は火葬にして土に歸し、土葬にして土に歸し、水葬にして土に歸す。土より生まれて土に歸るといふ。人はこの世に生まれて始めより終わりに至るまで、月日と地の厚徳により生活できるのである」(創立者のことば)

これを読まれた皆さんは、きっと「こんなこと誰でも知っているよ」と思われるでしょう。でも知っているだけで心からの感謝は忘れていないのではないのでしょうか。もし太陽がなくなったら何日くらい生きられるか、と調べた人がいて「時間的には瞬間にと言っているくらい短い時間で人類は死に絶える」という結果に驚愕しておられました。科学的知識はなくても先人たちはそのことを精神的に理解し、太陽に手を合わせていたのでしょうか。



OISCA MARCH 2026 | 3 Contents

- 04 OISCA NEWS 海外／国内
- 06 オイスカ便り 福島県推進協議会
- 08 TOPIC 東日本大震災から15年
“守る未来”へのステップ
- 12 OISCA SQUARE オイスカ歴史さんぽ／OISCAレストラン／お！ススメOISCA
- 14 INFORMATION 新着情報 ほか

What's OISCA

オイスカ・インターナショナルは、「すべての人々がさまざまな違いを乗り越えて共存し、地球上のあらゆる生命の基盤を守り育てようとする世界」を目指して1961年に創立された国際協力NGOです。現在、41の国と地域にネットワークを持ち活動しています。

公益財団法人オイスカは、1969年にオイスカ・インターナショナルの基本理念を具体的な活動によって推進する機関として生まれ、主にアジア・太平洋地域で農村開発や環境保全活動を展開。特に人材育成に力を入れ、オイスカの研修を修了した現地の青年は、各地で地域開発に取り組んでいます。国内では、農林業体験やセミナー開催などを通して啓発活動を積極的に進めています。

OISCAという名称の意味

O	rganization	機構	人間の生存に不可欠な“産業・精神・文化”のバランスを大事にした発展を世界規模で推進していくことを目的として、このように名付けられました。
I	ndustrial	産業	
S	piritual	精神	
C	ultural	文化	
A	dvancement	促進	

国内 オイスカ・インターナショナル パラオ政府と協約調印 青年育成と農業の発展に向け意欲



調印式で署名をするビクター大臣(左)と中野総裁

2025年12月22日、駐日パラオ共和国大使館で、パラオ政府農業・水産・環境省とオイスカ・インターナショナルとの基本協約の調印式が行われ、同省のステイブン・ビクター大臣とオイスカの中野悦子総裁が署名しました。協約は、パラオ政府からの強い要請に基づき、日本や第三国のオイスカの研修施設にパラオの青年を研修生として受け入れることや、同国への専門家派遣による農業技術協力についてなど実践的な内容

となっており、パラオ政府も研修生の派遣費用を往復分負担するなど意欲的な姿勢をみせています。またビクター大臣は「農産物を全面的に輸入に頼っている体制から脱却し、環境に優しく持続的な生産を目指したい」との意思を表明。オイスカの目指す方向性と合致する方針を打ち出すことで、協調のうえ政策を実現したいとの期待がうかがえました。調印式に立ち会ったピーター・アデルバイ駐日パラオ大使からは、かつてオイスカが現地で運営していた研修施設の再活用やオイスカの現地組織の強化なども提案され、同席したオイスカの永石安明副総裁も賛意を示しました。また、今年2月にパラオで開催された、日本政府とパラオ政府との第4回パラオ農業協力に関するタスクフォース会合にはオイスカも出席し、今回の協約をもとに、専門家派遣によるパニラ栽培の可能性調査や、来年からの研修生受け入れに向けた手続きを進めました。

国内 啓発普及事業

全国支部フォーラム開催 オイスカの強みを知り、連携を深める機会に

2025年12月4日、都内で開催されたオイスカ全国支部フォーラムに、支部会長や事務局スタッフなど約90名が参加。コロナ禍以降、全国の支部が対面で集う機会が減少していた中、オイスカの活動への理解と、支部間の連携を深める目的で、本部の主催で実施しました。第一部では、昨年オイスカの理事に就任した映像ジャーナリスト(元NHK国際放送局エグゼクティブプロデューサー)の榎原美樹氏が講演。国内2研修センターで自ら取材した映像を紹介するとともに、「活動を持続可能なものにするために、海外青年の育成を長年積み重ねてきたオイスカの強みを活かし、日本の若い世代をも巻き込んでいく術を考えていかなければならない」と、今後への期待と課題を語りました。



中部日本研修センターの日常と西日本研修センターのイベントの様子をまとめた取材映像に、支部職員から高い関心が寄せられた

国内 訪日研修生の帰国後の活動をサポート

フィジー開発銀行と協約締結 農業経営のスタートアップや拡大を支援

2026年2月7日、フィジー開発銀行(FDB)とオイスカとの間で、訪日研修生OB・OGを対象とした支援に関する協約の調印式が駐日フィジー大使館で行われました。FDBは、国内の農業を中心とした産業や、中小企業などの発展を支えるための金融サービスを通じ、雇用の創出、地域の発展の促進による経済成長を目指しており、オイスカ訪日研修生OBであるダメンド・ガウンダー氏(1986年/西日本)が会長を務めています。同氏の働きかけで、オイスカとそのカウンターパートである青年スポーツ省、FDBの話し合いの場が持たれ、オイスカの農業研修への支援について検討を重ねてきました。その中でFDBは、訪日研修生OB・OGを対象に、農業経営への新規



協約書を手にするFDBのガウンダー会長(左)とオイスカの永石安明専務理事

参入や規模の拡大などの資金を有利な条件で融資するほか、金融の基礎知識や事業管理に関する研修機会の提供も決定。訪日研修時の渡航費支援などについても引き続き協議が進められています。



国内 人材育成事業

2025年度研修修了式を各地で開催 スリランカの青年育成強化も進む

2025年度は、11カ国・地域22名の研修生が、各研修センターで一年間研修に励みました。

今年度は、特にスリランカ国立青年サービス委員会（N Y S C）の推薦する4名が訪日研修生として来日し、農業やリーダーシップについて学びを深めました。オイスカは、かねてより現地での農業研修や「子供の森」計画をN Y S Cと協働で行っており、同国におけるさらなる青年育成強化の機運が高まる中での派遣となりました。



四国研修センター修了式(右から2番目がアヌ)

そのうちの一人、四国研修センターのアヌが昨年12月13日、他センターに先駆けて開かれた修了式で、研修生を代

表してスピーチを行いました。

アヌは地域開発コースでの約10カ月の研修を振り返り「昨年2月に日本に来た時は、とても寒いし、言葉も話せず大変なことも多かったが、センターのスタッフや地元の方々に支えられて研修を終えることができた。帰国後はオイスカの活動を通じて、地域の発展に貢献できるよう頑張りたい」と挨拶。式には50名を超える出席があり、研修生を温かく見守ってきた会員や支援者を前に、今後の活動への強い意欲を示しました。

中部日本研修センターは今年2月7日に修了式を実施。西日本研修センターは3月7日に開催を予定しており、今年2年目の研修に入る中部日本研修センターの研修生を除く16名が、順次帰国の途に就いています。

なお来年度の研修生として13カ国・地域から28名がすでに来日しており、研修がスタートしています。26年度も、引き続き研修生への温かい応援よろしく申し上げます。

海外 インドネシア

研修生OB・OG100名と面会 50年を超える人材育成の成果を確認

2026年1月9〜16日、オイスカ本部職員および中部日本、四国、西日本研修センター副所長の計5名がインドネシアを訪れ、オイスカの研修を修了したOB・OGの取り組みや、各地での緑化や地域開発の現場を視察しました。

インドネシアでは、西ジャワ州のスカプミ研修センターと中部ジャワ州のカランガニアル研修センターが運営され



各研修センターでは、日本からの訪問に合わせてたくさんのOB・OGが集まってくれた

ており、農業研修や技能実習生の来日前の日本語研修などが行われています。両センターから派遣された訪日研修生、技能実習生数は累計で約600名に上り、現地センターの修了生とともにセンタースタッフとなったり、故郷で農業や建設業を営むなど各地で活躍しています。

今回の訪問では、オイスカインドネシア総局の協力を得て、センターを中心とする各地で約100名のOB・OGと面会しました。西ジャワ州では、自営農家としてキノコ栽培を行うジョコ・プラセテイヨ氏を訪問。ジョコ氏は訪日研修修了後、スカプミ研修センター勤務を経て、2011年からキノコの菌床栽培の研究に取り組み、事業を成功させました。その道のりについて「日本で学んだ農業経営の知識や、働き方への考え方が大いに役立った」と話しています。さらに中部ジャワ州では、農業資材や野菜の苗などを販売するマルチット・バスキ氏が、農家を支える存在



キノコの菌床を手に事業を説明するジョコ氏(2001・08年委託研修/花卉、菊栽培)

として信頼を集め、地域農業の発展に貢献している様子を確認しました。

また、オイスカが各地で行う緑化や地域開発、「子供の森」計画の現場では、訪日研修生OB・OGや現地研修センター出身者がスタッフやコーディネーターとして地域住民と協力し、地域が直面する課題に向き合いながら事業を推し進めている様子を視察しました。

1975年にオイスカがインドネシアで活動を始めてから50年。これまで輩出した研修生数は、7600人を超えます。このOB・OGがさまざまな分野で社会を支え、地域の発展や次世代育成に貢献している姿から、オイスカの人材育成の意義や、国内センターの役割を再確認する機会となりました。今後、OB・OGを通じた日インドネシアの連携や国内研修のさらなる充実化を図る方針です。



富士山の森づくり活動に参加(2025年7月)

福島県推進協議会は、オイスカが公益財団法人に移行した2010年度に福島県支局から推進協議会へと改変されましたが、支局発会以降、今までさまざまな会員の皆さんに支えられ、幅広い活動を

展開してきました。長く続けている取り組みとしては、毎年7月頃に行われる、富士山の森づくり活動のボランティアへの参加です。福島県から山梨県にマイクロバスで向かい、研修生や他の支部の会員の皆さんと交流しながら活動できる貴重な機会です。このボランティアに参加するのを目標に体調を整えている会員さんもあるほど、皆さん楽しみにしている活動のひとつです。

昨年はいよいよ海外ボランティアツアーも実施することができ、フィリピンのヌエバエシハ研修センターとバゴ研修センターを訪問してきました。オイスカが長年取り組んできた国際協力の現場を直接訪ね、現地で活躍するスタッフの皆さんと意見を交わす

ことができるのは、オイスカ活動の醍醐味と言えるのではないのでしょうか。過去に支援してきた場所がどのようになっているのかを確認できるのも、ツアーのよい点だと思います。また、推進協議会独自の海外ツアー以外にも、本部が企画した海外の行事などに



ヌエバエシハ研修センターにて(2025年9月)



福島県推進協議会 会長兼事務局長

根本 守

当推進協議会の会員が参加する機会もあり、それぞれの関心に合わせた活動に参加してもらえよう、今後も働きかけてまいります。私たちは小さな推進協議会ですが、その分会員同士が親しい関係を築いており、会合には夫婦で参加される会員も多く、和気あいあいとした雰囲気の良い組織です。会員同士のつながりの強さは他の組織には負けません。今年もみんなが富士山の森づくりへの参加を楽しみにしています。富士山でお会いしたらぜひ声をかけてください！

推進協議会概要

福島県支局から2010年度に福島県推進協議会に改編。福島県内の経済の中心である郡山市に拠点を置き、現在は16名の会員と活動を推進しています。小さな会ながらも活動には夫婦や親子、きょうだいで参加する会員が多く、オイスカ活動以外の場面でも結びつきが強いのが特徴です。



全国の支部や支援組織をピックアップして紹介します

今回は

福島県推進協議会

規模は小さくとも絆の強さでは日本一を自負しています！

呑んで！
おいしい地酒

近況

REPORT

フィリピンで2つの 研修センターを訪問

2025年9月1〜6日、福島県推進協議会の会員ら6名がフィリピンを訪問。過去に、郡山支局を中心に募金活動をして又エバエシハ州にデイケアセンターを寄贈したことがあり、今回は、その後どのように活用されているのかを視察することをメインの目的として現地を訪問しました。前回の訪問から10年以上が経過しており、マニラの発展ぶりに驚かされました。



デイケアセンターの銘板を前にする会員の橋本さん。福島県の郡山支局からの支援で建てられたことが書かれている

まず訪問した又エバエシハ研修センターは、訪日研修生OBが中心となって運営されており、小さいながらも農場をはじめ養豚や養鶏などの施設もよく管理されている印象でした。

翌日訪問した「子供の森」

計画参加校では、大勢の子どもたちがゲートのところに並んで歓迎してくれ、感激しました。その後はこちらのお国ならではの歓迎セレモニー。幼稚園児から高学年の児童だけでなく、先生、しかも近隣の学校の校長先生までも登場し、歌や踊りを披露してくれました。まだ若い女性の校長先生が多く、フィリピンではそれが当たり前なのだそうです。

そして、一番の目的のデイケアセンター。就学前の子どもたちが通う保育所のような役割をしています。ここでも歓迎のセレモニーを催してくれ、保護者だという女性たちがダンスを披露してくれたのですが、なんと皆さんこのデイケアセンターの卒業生なのだそう。村で育った女性たちが、自分の子どもと同じデイケアセンターに通わせている



2024年秋から日本で働くメルビン君(前列右から2番目)。小学校での記念植樹後、自分の名前の看板を立てて記念撮影

ことを知り、このセンターが2世代にわたって村に貢献していることを実感することができ、嬉しく思いました。

実は今回、会長の会社で受け入れているフィリピン人青年、メルビン君の里帰りも実現させようとツアーに参加させ、彼のふるさとであるネグロス島のバゴ研修センターも訪問してきました。メルビン君のご両親や恋人もセンターに集まり、賑やかな夕食会が催され、楽しく過ごさせてもらいました。1泊2日の駆け足でしたが、センターで行っている養蚕普及プロジェクトについても理解を深めることができました。

歌、山、温泉、うまいものと地酒！

「エンヤー会津磐梯山は宝の山ヨ〜」と民謡に歌われる磐梯山。

「朝寝、朝酒、朝湯が大好きな小原庄助さん」と、楽しい歌にもあるように、たくさんの温泉が福島にはあります。

福島は縦に三等分にして、浜通り、中通り、会津に分かれます。浜通りは常磐ものと言われるヒラメ、イセエビ、タコ、メヒカリと、新鮮な魚がたくさん。中通りは果物が豊富で、夏には何といっても桃！甘くてとてもおいしいです。そこから梨、ブドウ、りんご、

柿と続きます。会津には喜多方ラーメン、ソースカツ丼、雪国ならではの郷土料理こづゆ、にしんの山椒漬けなどのご当地グルメが！

そして、私の一番のおすすめはお酒です。豊かな水と米に恵まれ、おいしい地酒がたくさんあり、毎年品評会の上位を占めています。

小原庄助さんは朝寝、朝酒、朝湯で身上を漬してしまいましたが、福島に来たら、温泉と常磐物の魚においしい地酒をぜひ召し上がってください！

福島県推進協議会事務局 根本明美



福島県の魅力が伝わる公式ポスター



福島県提供

TOPIC

東日本大震災から15年 “守る未来”へのステップ

2011年3月に発生した東日本大震災。同年からオイスカは、宮城県名取市で被災農家を中心とする「名取市海岸林再生の会」と共に、「海岸林再生プロジェクト」を開始。以降、地元林業事業者と全国のボランティアの力を得ながら、強い海岸防災林を再生する取り組みを今日まで継続しています。育てた苗を植え、それがさらに生長していく過程で、プロジェクト地やその周辺の街並みも復興に向けて少しずつ変化するだけでなく、震災の経験を通して、日頃から災害に備えることの大切さも、被災地を中心に発信されるようになりました。“被災”から“復興”、そして“防災・減災”へ。震災から15年経つ今、“守る未来”へ向けた意識の高まりと、プロジェクトのこれまでのを紹介します。

海岸林再生プロジェクト全景 (2025年5月)

協定面積 103.05ha

年代別
植栽地

2019・20年

2015年

2014年

2016年

2017年

2018年

2020年10月に復旧し、再オープン。屋上からは海岸林を見渡すことができる

名取市サイクルスポーツセンター

仙台空港

プロジェクトの重要拠点!

オイスカ名取事務所



2014年植栽地



2014年に植えた最初の植栽地のマツ(上写真)は最大9mと見上げるほどになり、樹高の計測も一苦労。15~20年にかけて植えたマツも順調に生長し、上空からその様子がよく見て取れる



被災から復興へ

海岸林再生プロジェクト 第1次10ヵ年計画(2011-20)

「海岸林再生プロジェクト(以下、プロジェクト)」の現場、宮城県名取市のクロマツ海岸林は、仙台藩初代藩主伊達政宗が領内への造林を命じたことに始まると伝えられ、以降何度も植え直されながら、潮風や飛砂、春から夏にかけて吹く冷たく湿った風「ヤマセ」から、後背地の人々の暮らしや農地を守ってきました。そんな中、2011年3月11日、マグニチュード9.0という日本国内観測史上最大級の地震が発生。この地震による津波は岩手県、宮城県、福島県を中心とする8県の広範囲に大きな被害を及ぼしました。東北各地の海岸林も、被害面積が3660haと甚大で、400年の歴史ある名取市の海岸林も、壊滅的な被害を受けました。



被災直後の名取市海岸林。奥に仙台空港が見える

国や県、市との協定、林業専門家の協力、そして地元農家の方々の理解を得て、クロマツの苗木づくりから植栽、その後の保育、管理までを行う長期プロジェクトを始動させました。11〜20年までの10ヵ年を一区切りとし、被災農家を中心に結成された「名取市海岸林再生の会」との連携のもと、海岸林100haの再生、50万本の苗木の生産、10億円の資金確保を目標としました。植栽地には、「強靱な防災林」の役割を果たせるよう、マツが地中に深くしっかりと根を張るための工夫として、国が盛り土を施工。この植栽基盤が造成された場所に、オイスカは14年から植栽を開始し、20年度末までに作業道や防風

被災地から世界へ 防災意識の高まり

こうしてプロジェクト最初の10年が積み重ねられる中、災害の傷跡を色濃く残しながらも、周囲の環境も少しずつ整えられていきました。宮城県内においても、大津波に備える多重防壁(防潮堤の背後に、防災林やかさ上げ道路などの減災機能を持つ施設を配置することで、その内側の居住地を守る)や居住区の高台・内陸移転など、さまざまな対策のもと、災害に強いまちづくりが進められました。さらに仙台市は、被災の経験と再生を世界に発信するため、震災からわずか2ヵ月後に国連防災世界会議の誘致を表明。その後2015年に、第3回会議が仙台市で開かれ、国連加盟国185カ国からの代表団6500人以上が、力

暮らしの中で備えよう!!
日々の防災意識が命を守る!

「はなちゃんとひなんくんれん」
さく・え ものえまいこ/河北新報出版センター/B5変型判/1500円(税別)

名取市出身で、防災士の資格を持つものえまいこさんによる、親子で読む初めての防災読本。お母さんと小さな女の子はなちゃんが、おうちで避難訓練にチャレンジする内容で、防災グッズや避難時の行動など、ご自身の被災経験をもとに「もの時のど動くか、どう備えるか」をイラストで分かりやすく伝えています。プロジェクト地にもほど近い、名取市震災復興伝承館でも販売されています。

作者のものえまいこさんは、イラストレーターicoとしても活躍。「海岸林再生プロジェクト」の広報イラストなども手掛けています!

購入はこちら

強く復興する東北地方の様子を確認しました。また、会議の成果として採択された「仙台防災枠組2015-2030」では、震災の教訓も取り入れられ、新しい災害リスクを防ぐとともに、既存の災害リスクへの多角的な減災対策を進め、多様なステークホルダーが協力して社会のレジリエンスの向上を目指すことなどが決められました。そして、その成果を測るため、災害による死亡者や被災者の減少など、世界規模の具体的目標が初めて設定されました。かつての被災地が災害に強いまち



震災の経験を防災につなげる取り組みとして、「仙台防災未来フォーラム」も開催されている。そのプログラムの一環として、昨年オイスカの担当スタッフもトークイベントに登壇した。今年も参加予定

づくりの現場となり、さらに災害復旧だけでなく防災・減災にも重点を置いた新しい方針を世界へ発信する拠点となつていきます。

※国連主催の国際的な防災戦略を策定する会議。第1回(1994年)は横浜、第2回(2005年)は神戸といずれも日本で実施された

強い防災林をつくるために

海岸林再生プロジェクト
第2次10カ年計画（2021-30）

被災地が防災モデルの拠点へとあゆみを進めるとともに、プロジェクトも全ての植栽を2020年に完了。21年からは、より強い防災林に育てるためのクロマツ林の保育・管理を中心とした、第2次10カ年計画がスタートしました。その主な活動を、2つのポイントに絞って紹介します。

① 強くするために伐る！ 本数調整伐

自然災害に負けず、あらゆる機能をしっかりと果たす強靱な防災林をつくるには、一本一本がより高く、太い幹で、豊かな枝葉を備え、より深く、広く根を張ったマツを育てなければなりません。苗木が小さいうちは、互いに潮風などから守り合って生長するのにある程度の密植が必要です。しかし大きくなるにつれて、隣り合うマツの枝が重なり合うことで陽の当たらない下枝が枯れ上がりすぎるだけでなく、周囲のマツ同士の根が生長を



伐ったマツを林外へ運び出すのも重労働。このマツは国、県の負担のもと、再利用される

阻害してしまいます。これを抑え、強いマツにするためには本数調整伐（間伐）が不可欠とし、21年に試験伐採を実施。「一伐二残（一列伐って2列残す）」、伐採率33%の間伐が最適との考えのもと、22年から宮城中央森林組合や松島森林総合、ボランティアの手で段階的に本数調整伐が進められました。そして昨年、全植栽地の95%が終了。これを1巡目とし、この先数十年かけて、植栽時の1haあたり5000本から8000〜10000本へと減らしていくこととなります。

開始当初は、伐採の進め方や伐採率など、行政や専門家にとっても最適解がない中での実施でした。オイスカではほかの被災海岸林に先駆けて作業を進め、伐採率の異なる試験地におけるデータを収

② クズとの闘いと ボランティアの力

集・蓄積しています。これらが将来、ほかの現場でも役立てられればという思いで、活動が続けられています。

プロジェクトではボランティアを林業作業員の役割を補完する「戦力」として考え、下草刈りやツルマメの抜き取り、溝切り（排水溝づくり）などのさまざまな作業を、全国からのボランティアと共に行ってきました。特にコロナ禍前後から勢力を拡大した「クズ」の除去にボランティアが力を発揮。クズは、アメリカで「グリーンモンスター」と呼ばれるほど旺盛に繁殖し、巻き付いたほかの植物を枯らしてしまう植物です。林内への侵入を防ぐため、林業作業員が植栽地の周囲に薬剤を散

海岸林再生プロジェクト 第2次10カ年計画のあゆみ

プロジェクトの活動

全体の動き

第2次10カ年計画 スタート！

● 本数調整伐（間伐）試験開始
● コロナ禍で年間ボランティア数が約1800人から313人に減少。クズ繁茂が深刻化

2021年

● 本数調整伐（2014年植栽地/10・13ha）実施
● 年間ボランティア数が868人まで回復

2022年

● 本数調整伐（2015年植栽地/14・53ha）実施
● ボランティアによる本数調整伐を初めて実施。作業前の安全講習も開催

2023年

● 令和2年度「森林・林業白書（林野庁）」でプロジェクトが紹介される
● プロジェクト発足10年を記念し、名取市海岸林再生の会が石碑建立

メディア等での紹介300回突破！

● 「水利科学」（日本治山治水協会）に「名取市海岸における海岸林再生植林等の取り組み―実行方法と生育状況―」掲載（オイスカ名取事務所統括 佐々木廣一 著）

● タイ・ラノン県マングローブ植林プロジェクトの漁村住民21名の研修受け入れ



● 雇用数延べ1万人突破



名取市海岸林から海外へ！ 広がる防災・減災の森づくり



スタン

オイスカインドネシア
マングローブ植林プロジェクト
調整員補佐
(カラングニアル研修センターOB)

私は中部ジャワ州スラマン県を拠点に、ジャワ島北岸の7県3,500haのマングローブ植林プロジェクトの調整業務と、ドローンを使ってマングローブの生育や高潮の被害状況を把握し、正しく植林が進められているか確認する仕事を担っています。沿岸地域では、地盤沈下や海岸浸食で住民たちの生活が脅かされており、各現場の調整員たちと共に、植林で内陸の人々の暮らしや自然を守ろうと、日々格闘しています。

海岸林再生プロジェクトの現場を訪れたのは、2019年、オイスカの各国の植林プロジェクト責任者が集まる「Eco-DRR※研修」に参加した際のことでした。そこで、名取市海岸林の長期的な保育技術をはじめ、各地の防災・減災にかかる造林の現場を実際に見て学ぶことができ、その経験が今のモチベーションとなっています。

マングローブ林を未来につないでいくため、ほかの調整員やさらに若い世代にも、日本の森林再生や沿岸防災技術を学び、体験する機会を持ってもらいたいと思います。



名取市海岸林の現場では、多くのボランティアと共にツルマメ除去の作業も体験した

※Eco-DRR
森林など生態系を活用した防災・減災

布し、ボランティアは鎌と希釈した除草剤入りの醤油差しを手に、林内に分け入って活動します。マツの硬い枝葉や、それに巻き付いて緑の壁のようになりびっしり伸びたクスノキの間に身をねじ込み、その根元を切って除草剤を塗布する、過酷で果ての見えない作業です。それでもボランティアの足は途絶えることなく、協定区域100haの約25%に侵入したクスノキの繁茂を最小限に抑えることができています。

これまで、約1万7千人のボランティアが活動に参加し



マツを覆うクスノキを除去していく(2025年9月)

ました。この活躍がなければ、現在の海岸林の姿はなかったと言えます。

震災から15年。プロジェクトは少しずつ成果を上げながら、防災を実現する「守る未来」へと進み続けています。第2次10カ年計画は後半戦に入りましたが、海岸林の再生には、なお長い年月がかかります。間伐やクス対策、この数年に発生した病虫害への対応など、多くの人手を要する課題も続く中、かつての被災地が防災発信の拠点となっているように、プロジェクトを通して広く次の世代に防災林の意義を伝え、海岸林が将来にわたって人や暮らしを守る存在となるよう、引き続き取り組みんでいきます。



病気のマツは枯れて、色が変わっている

- 本数調整伐(2018年植栽地/16.1ha)実施
- 全植栽地の1巡目の間伐95%が終了。年間ボランティア数が1276人に回復
- 協定区域内でマツ材線虫病を初めて確認。行政と連携した対策が急がれる



- マツケムシが異常発生
- 本数調整伐(2016・17年植栽地/22.78ha)実施
- ボランティア数延べ1万5000人突破

2025年

- 仙台防災未来フォーラム2025で発表
- 第48回全国育樹祭みやぎ2025開催。県より宮城県緑化等功労者表彰を受ける。式典後、ご臨席の秋篠宮皇嗣同妃両殿下に、佐々木統括および本部の浅野奈々穂がプロジェクトについて説明する機会を得た

- 「山林(公益社団法人大日本山林会)に『最強の海岸防災林(宮城県名取市)再生への挑戦』掲載(プロジェクト担当部長 吉田俊通著)

寄附総額10億円突破！(助成金含む)



石碑が完成！
バンザイ！



活動報告会開催300回・参加者4万5000人突破！

- 宮城県より「令和6年度森林づくり・木づかい表彰」を受ける



- 「松がつなぐあした」(小林省太著)増補改訂版刊

2024年

「オイスカ」
歴史さんぽ

Vol.17

「子供の森」計画 子ども親善大使事業
小さなリーダーが各国で活躍！



1997年

日本の小学校を訪問。当時は学校交流が活動の中心だった



2017年

親善大使の経験をきっかけに日本が大好きになり、ミャンマーのオイスカ研修センターで日本語を学び、現在留学生として日本で生活しています。



ノルチャー
ミャンマー エサジョ郡出身
(2026年)

東京都水の科学館で、水の循環や大切さについて学びを深めた。
右端が親善大使として来日したノルチャーさん(当時)

「子供の森」計画の取り組みのひとつに、現地で活動に参加する児童や生徒の代表を日本に招聘する、子ども親善大使事業があります。1994年の開始以来、親善大使たちは支援者への活動報告をするとともに、同世代の子どもたちとの交流を通じて学びを深め、その経験を母国での取り組みに活かしてきました。当初、現地の活動は植林が中心でしたが、時を経て、ごみ問題や生物多様性などの多岐にわたる課題や環境意識の啓発にも取り組むようになりました。それに伴い、親善大使事業でも日本の先進的な環境保全や環境教育を体験するプログラムを取り入れ、帰国後の活動に活かすための知識や意欲を育てています。

2017年に、親善大使として来日した

ノルチャーさんは「木々の中、土や葉に触れ、自然の音に耳を傾けながら遊んだことは、普段味わえない楽しさだった。一緒に来日したインドネシアの友だちと活動する中で、国を越えて助け合うことや思いやりの心も身についた。そして自然は多くのことを教えてくれる存在だと気づくことができた。これらの体験は、今でも自然を大切に思う気持ちにつながっている」と当時を振り返ります。

各国からは、親善大使OB・OGたちが、現地の森づくりや環境教育、地域の課題解決に小さなリーダーとして取り組む姿が数多く報告されています。こうして子どもたちの経験や学びは、国を越えた交流を育みながら、未来の環境を守る力へとつながっています。

写真から伝わる
さまざまなお思いに
フォーカス！





屋台でも
食べられる！

これ食べてみて！
(運転手さん)

甘すぎる～！
(炭焼き専門家の千田淳さん)



世界一甘い!? インドのお菓子 \\ グラブ・ジャムン //

グラブ・ジャムンは「世界一甘いお菓子」ともいわれる、ドーナツをシロップに漬けたとても甘いインドのお菓子です。「グラブ」はバラ、「ジャムン」は果物の名前を意味し、シロップにバラの香りづけがされていること、形がジャムンに似ていることが名前の由来なのだそうです。濃縮乳や小麦粉、砂糖、油脂などでできたドーナツ生地を揚げたものを、砂糖と香りづけのローズウォーターやカルダモンなどのスパイスを使ったシロップに漬けてつくられています。結婚式やお祭りなど、お祝いの場で食べる人が多いようですが、レストランや屋台などでも売られ、どこでも気軽に食べることができます。

ある時、オイスカが活動するガンジス河流域のバラナシという町で、現地の運転手さんにおめでたいことがあり、ご馳走してくれました。味にクセがなく、スパイスやハーブがふんだんに使われるインドの食べ物の中では、日本人にも難易度が低めだと感じましたが、現地で指導に当たる日本人専門家は「甘すぎる～！」とのこと。人によっては強烈な甘さのようです。(海外事業部 山本悠里)



売り上げの一部は、
生産者と現地の活動への
寄附になります！



HANDMADE

お！ススメ
OISCA

国内外のオイスカスタッフから、さまざまなジャンルの
「オススメ」を紹介します！

プロジェクトHP

ハンドメイドのモンゴルスリッパ

「熊本×モンゴルプロジェクト」製品



モンゴルの厳しい大自然の中で育ったオーガニックウールを、伝統的なフェルト技術を活かして、一つひとつ手仕事で仕上げたスリッパ。冬は暖かく夏はさらりと快適。手仕事ならではのやさしい履き心地です。研修生OGトゥメンさんが立ち上げた女性自立支援プロジェクトをオイスカ熊本県推進協議会が引き継ぎ、オイスカモンゴルと協働して、さまざまなフェルト製品を現地の女性たちと共につくっています。(熊本県推進協議会M)

2025オイスカ冬募金
ネクストゴール達成!
 ご支援ありがとうございました!

「この地球で、これからも暮らしていくために」をテーマに実施した2025オイスカ冬募金は、開始から12日で当初の目標700万円を達成。期間終了までに、ネクストゴール1000万円を超える1千25万3306円(433人/1月31日現在)のご寄附をいただくことができました。皆さまの温かいご支援に、心より感謝申し上げます。

また今回の募金では、昨年11月のフィリピン台風被害およびスリランカ豪雨災害への支援も受け付けており、現地では段階的な復旧と支援活動が続けられています。

お寄せいただいたご寄附は、世界各地の活動や災害支援の現場で大切に活用いたします。今後とも変わらぬご支援をよろしくお願いいたします。



災害復旧・支援状況

フィリピン

昨年11月に台風25号(カルマエギ)の被害を受けたバゴ研修センターでは、敷地内で倒れた大木の処理や屋根が壊れて雨漏りがする建物などの修繕を、被災直後から優先的に開始し、復旧を進めてきました。11月末には予定していた日本からの訪問者を受け入れられる状況にまでなりましたが、現在も手つかずの施設がいくつか残っています。特に、センターの行う養蚕普及事業の重要施設である製糸場のボイラー棟や壮蚕所は倒壊し、復旧の目途が立っていません。ほかにも修理の必要な建物が多く、今回の寄附金等を活用して今後可能な箇所から復旧を行い、これまで通りの活動が続けられるよう努めてまいります。



大きな被害を受けたボイラー棟

スリランカ

昨年末に発生したサイクロンで大きな被害を受けたスリランカでは、「子供の森」計画に参加する学校を通じた支援が続いています。特にクルネーガラ県内の被害の大きかった地域を対象に、制服用の生地や文房具などの学用品の寄贈を進めています。子どもたちからは、「家もすべて水につかり悲しかったが、また勉強できるようにサポートしてもらえてうれしい」といった声も届いています。また、オイスカが日頃から連携して活動する国立青年サービス委員会(NYSC)の農業研修センターでも、壊滅的な被害を受けたことから、研修再開に向けた資金的・人的な協力を続けています。



洪水被害が深刻だったパンナラ学校では、400人の生徒を対象に学用品を寄贈

研修センター日記

博多のクリスマスイベントにも出演!

Vol.4 西日本研修センター

1年間の研修の締めくくり

2025年2月にスタートした今年度の研修も、今年の3月で終了。1年を通して、たくさんの勉強、実習、交流を行いました。当初、9ヵ国1地域から集まった研修生たちはどこか不慣れたところもありましたが、多くの経験を分かち合い、今では家族やきょうだいのようになりました。昨年12月末に開催したセンターの忘年・クリスマス会では、研修生が仮装し、彼らの普段見られない一面を見ることができて、皆でお腹を抱えて笑い合いました。会には農業ボランティアの皆さんも参加いただき、楽しいひと時を過ごしました。

いよいよ研修修了に近づきましたが、彼らがこれから母国でどんな活躍をみせるのか、楽しみです。一年間応援ありがとうございました。(廣瀬)



クリスマス会は毎年大盛り上がり!



ご支援ありがとうございます！

新会員の紹介

新しく会員になられた方は次の通り。(2025年11月1日～2026年1月9日までの間、本部登録済み。順不同、敬称略)

- 特別法人
【富山県支部】北陸電力送配電株式会社【大阪府】株式会社地球のために

- 維持法人
【石川県】北陸通信ネットワーク株式会社【愛知県】株式会社「Ocean Trade House」【福岡県】有限会社玄海砥油

- 維持個人
【宮城県】鈴木賢司【福島県】谷口保夫／菊池亮介／物江麻衣子【茨城県】飯屋茂【愛知県】井上知足／佐藤勝代／平松正樹【香川県】松熊秀樹【徳島県】木内隼

寄附

2025年11月1日～12月31日までにいただいた寄附は次の通り。(順不同、敬称略)

- 佐伯栄子クラウドファンディング／フィジーでの活動に150万円

- 九州電力生活協同組合／人材育成事業と海外開発協力事業に100万円

- 花王株式会社／海外開発協力事業に70万8663円

- 堤義員(千葉県)／「子供の森」計画に63万円

- 四国電力総連／「子供の森」計画と啓発普及事業に合わせて40万円

- リタ・マークス株式会社／海外開発協力事業に36万9300円

- オイスカ中華民国総会／ミャンマー地震復興支援に36万円

- 一般社団法人MDRT日本会／海岸林再生プロジェクトに30万円

- トヨタモビリティパーツ株式会社
社宮城支社／海岸林再生プロジェクトに20万円

- 社会福祉法人西日本新聞民生事業団／人材育成事業に18万円

- 株式会社「O' Nature」／人材育成事業に13万9000円

- 仙台トヨベット株式会社／海岸林再生プロジェクトに28万2860円

- 石川隆(北海道)／海外開発協力事業に13万1250円

- オイスカ碧南高浜推進協議会女性部／啓発普及事業に12万9697円

- 株式会社木下写場／人材育成事業に11万円

- 大豊工業株式会社／人材育成事業に10万1328円

- 雨谷麻世(東京都)／「子供の森」計画に10万円

2025 オイスカ冬募金

2025年12月1日～12月31日までに「2025オイスカ冬募金」にいただいた寄附(10万円以上)は次の通り。(順不同、敬称略)

- 株式会社大江鐵工／100万円

- 株式会社フレックスインターナショナル／20万円

- 薦田稔(福岡県)／15万円

- 瓜生道明(福岡県)／10万円

- 久和進(福岡県)／10万円

- 古川淑子(福岡県)／10万円

- 根本明美(福島県)／10万円

- 山田雅則(神奈川県)／10万円

- 森藤左エ門(愛知県)／10万円

- 川崎浩(茨城県)／10万円

- 泉雅文(香川県)／10万円

- 東洋金属株式会社／10万円

- 八十川紀夫(香川県)／10万円

- 石見すみえ(埼玉県)／10万円

- 有限会社大地企画／10万円

編集後記

今号のニュース(5ページ)で四国研修センターの修了式の写真を掲載しましたが、実は候補に右の写真もありました。国籍や言葉、文化が違って、はじける笑顔で飛び上がって共に喜びを分かち合える。そんな仲間と出会い、国境を越えた親愛の輪が広がること、訪日研修の魅力であり、ひとつの大きな成果であると感じます。(倉本)



今月の表紙写真

Photo by Hayashi Kumiko



色とりどりの伝統衣装サルワールカミューズを着て、だるそうにしているのは、まだ頭も体も目覚めていないから。体操でシャキッと目覚めてから掃除所に向かうのが、毎朝の日課です。(バングラデシュ女性研修センター)

次号予告

OISCA
MAY | 5
2026

《TOPIC》

南の海を愛した男が託した未来(仮)

OISCA 3月号
発行人／中野悦子
発行所／公益財団法人オイスカ
〒168-0063 東京都杉並区和泉2丁目17番5号
TEL (03) 3322-5161 FAX (03) 3324-7111
E-mail oisca@oisca.org
編集：OISCA / 吉田俊通 倉本有沙
アートディレクション／土肥幹人
デザイン／土肥幹人 坂巻貴行
印刷・製本／株式会社ケープリント



本誌掲載の記事・写真・イラストなどの無断転載を禁じます。

WESTERポイントで子どもたちと一緒に森を守ろう!



あなたの「WESTERポイント」が子どもたちが植える“未来の苗木”になります。
例えば、3,000ポイントが苗木10本分の支援に!

JR西日本グループ共通ポイントサービス「WESTERポイント」を通じて、はげ山が広がり、環境劣化が進むフィリピン・ルソン島北部の森林再生を支援しませんか。現地では地域に緑を取り戻すため、学校を拠点に子どもたちが自ら苗木を植え、森を育てる「子供の森」計画が進められています。あなたの寄附が、子どもたちの森づくりを後押しします。

未来の森を一緒に
つくりませんか?

WESTERポイント

ポイント寄附はこちらから

Step1

下記QRコードから専用ページにアクセス
もしくは「WESTERポイント 社会貢献」で検索!



Step2

「森を育て、人を育てる。
アジアの森林再生プロジェクト」を選択
100ポイントor1000ポイントの寄附ができます。



Step3

カートに入れ決済画面へ



オイスカは、会員・支援者の皆さまからの会費や寄附金によって運営されています。「公益法人」としての認定を受けているため、所得税・法人税・相続税、また、条例で定められた自治体では住民税も控除対象となります。受領書をお届けしますので、申告の際にご利用ください。

● 特別会員 (年額1口) 法人 / 10万円 個人 / 5万円

● 維持会員 (年額1口) 法人 / 4万円 個人 / 2万円

● マンスリーサポーター 個人 / 月々 2,000円~

※ 特別会員と維持会員には、会員としての差異はなく、口数とともに、自由にお選びください。
※ 会員、マンスリーサポーターの皆さまには、広報誌「OISCA」をお届けします。
※ 新入会年度は、入会月によって納入金額が異なります。

● 「子供の森」計画支援金 (年額1口) 個人・法人 / 5,000円

※ 海外の支援地域の活動案内 (年1回) やニュースレター (年2回) をお届けします。
※ 子どもたちからのグリーティングカード (年1回) が届きます。

ウェブからも支援のお申し込みができます ▶ <https://oisca.org/>

お問い合わせや資料請求のお申し込みは



公益財団法人
オイスカ

〒168-0063 東京都杉並区和泉2-17-5
☎ (03) 3322-5161 ☎ (03) 3324-7111
E-mail oisca@oisca.org
<https://oisca.org/>

国内研修センター

中部日本研修センター 〒470-0328 愛知県豊田市助八町助八27-56 ☎0565-42-1101 ☎0565-42-1103
関西研修センター 〒980-0014 仙台市青葉区本町2-10-28 カメイ仙台グリーンシティビル6F ☎022-265-3350 ☎022-281-9077
四国研修センター 〒761-2103 香川県綾歌郡綾川町陶5179-1 ☎087-876-3333 ☎087-876-3334
西日本研修センター 〒811-1112 福岡県福岡市早良区小笠木678-1 ☎092-803-0311 ☎092-803-0322

国内支部

北海道支部 〒062-0931 札幌市豊平区平岸1条1丁目8-8 ラルズ生活研究センター1F ☎011-867-9684 ☎011-867-9685
宮城県支部 〒980-0014 仙台市青葉区本町2-10-28 カメイ仙台グリーンシティビル6F ☎022-265-3350 ☎022-281-9077
首都圏支部 〒168-0063 東京都杉並区和泉2-17-5 (公財)オイスカ内 ☎03-3322-5161 ☎03-3324-7111
山梨県支部 〒400-0016 甲府市武田1-2-5 3F ☎055-267-5951 ☎055-267-5951
長野県支部 〒380-0838 長野市東町584 長野県経営者協会総務部内 ☎070-5550-7394
富山県支部 〒939-2226 富山市下夕林280-3 ☎076-468-7120 ☎076-468-7128
静岡県支部 〒431-1115 浜松市中央区和地町5815 ☎053-401-3980 ☎053-401-3981
愛知県支部 〒470-0328 豊田市助八町助八27-56 オイスカ中部日本研修センター内 ☎0565-42-1162 ☎0565-42-1103
岐阜県支部 〒503-8603 大垣市久徳町100番地 太平洋工業株式会社内 ☎0584-47-9420 ☎0584-47-9419
関西支部 〒541-0058 大阪市中央区南久宝寺町4-4-1 新御堂ビル ☎070-5550-7394
広島県支部 〒730-0041 広島市中区小町4-33 衛エネルギーA&B/パートナーズ内 ☎082-242-7804 ☎082-242-4706
四国支部 〒761-2103 香川県綾歌郡綾川町陶5179-1 オイスカ四国研修センター内 ☎087-876-3333 ☎087-876-3334
西日本支部 〒811-1112 福岡市早良区小笠木678-1 オイスカ西日本研修センター内 ☎092-803-0311 ☎092-803-0322

OISCA NETWORK

福島 〒963-0534 郡山市日和町字大塚50-8 (南根産業内) ☎024-958-2643 ☎024-958-3741
茨城 〒311-0113 那珂市中台852-9 ☎029-298-2539 ☎029-298-2539
神奈川 〒231-0021 横浜市中区日本大通り33 神奈川県住宅供給公社ビル1F ☎03-3322-5161
三重 〒510-0958 四日市市小古曾1-1-7 中村建設(株)内 ☎059-345-1101 ☎059-345-0745
奈良 〒630-8444 奈良市今市町53-6 ☎0742-63-6277 ☎0742-63-6277
徳島 〒770-8555 徳島市寺島本町東2-29 四国電力(株)徳島支店総務課内 ☎088-656-4593 ☎088-656-4511
愛媛 〒790-0924 松山市南久米町乙24-84 ☎070-8524-0349 ☎089-948-8682
高知 〒780-0870 高知市本町1-6-24 高知商工会議所総務企画部内 ☎088-875-1177 ☎088-873-0572
佐賀 〒840-0826 佐賀市白土2-1-12-4F ☎0952-28-1368 ☎0952-28-1368
長崎 〒858-0908 佐世保市光町109 麻堀内組内 ☎0956-47-2127 ☎0956-48-5069
熊本 〒865-0055 玉名市大浜町2173-1 丸光グループ本社内 ☎0968-76-2161 ☎0968-76-2162
大分 〒870-0001 大分市生石港町2-12-14 南大地企画内 ☎097-533-2101 ☎097-533-5040
宮崎 〒880-0879 宮崎市宮崎駅東2-4-9 ☎0985-26-5673 ☎0985-26-5673
鹿児島 〒892-0817 鹿児島市小川町15-1 南日本総合サービス内 ☎099-224-3833
沖縄 〒902-0077 那覇市長田2-12-9 セレクション長田101 ☎098-943-2871 ☎098-943-2881